

益田市中吉田平田土地区画整理事業に伴う  
平田遺跡発掘調査報告書

2007年3月

益田市教育委員会

## 序

益田市は高津川と益田川によって形成された広い平野部を抱え、後背の山間部には広大な広葉樹林を擁し、この恵まれた自然の恵みと穏やかな気候により古くから人々が生活していたことを示す多くの遺跡が市域全体に数多く分布しています。

さて、このたび区画整理事業に伴い平田遺跡の発掘調査を実施したところ、中世遺跡の一端が明らかになり、貴重な資料を得ることができました。益田川の下流域については、中世の大規模集落沖手遺跡の発掘調査を契機として、中世の交易流通に密接に関わる重要な地域として近年新たに注目されてきましたが、平田遺跡も中世益田の歴史を解明するうえで貴重な遺跡と評価されるものです。

本書は発掘調査の概要をまとめたものですが、広く活用していただき、地域の歴史や遺跡保護に対する理解と関心を深めていただけ一助となれば幸いです。

調査にあたって多大なご協力をいただきました益田市中吉田平田土地区画整理組合、土地所有者、地元自治会の皆様に厚く感謝を申し上げまして報告書刊行のごあいさつといたします。

平成19年3月

益田市教育委員会  
教育長 陶山 勝

## 例　　言

1. 本書は平成18年度に益田市教育委員会が益田市中吉田平田土地区画整理組合（大場武太理事長）から委託を受けて実施した上地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要である。
2. 調査に要する経費については、道路建設部分100%と墓地造成（個人換地）部分に係る経費の80%を区画整理組合が負担し、墓地造成部分に係る経費の20%を国庫補助事業市内遺跡発掘調査等で負担した。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 益田市教育委員会 教育長 陶山 勝  
事務局 益田市教育委員会文化振興課  
調査員 木原 光（文化振興課課長補佐）  
調査指導 島根県教育委員会

4. 現地調査期間中には次の方々からご協力をいただいた。  
人場辰夫（土地所有者）、大場仁夫（土地所有者）、株式会社山陰ブルドーザー工事、建鉄工業株式会社、益田市中吉田平田土地区画整理組合
5. 現地調査及び資料整理には次の方々に参加していただいた。  
梅津 茂、岡本敬子、岡本昌幸、亀山武徳、桐田美智子、坂本文江、島田大造、田原美代子、寺井フミ子、野村紀年、藤原 稔、朝山泰廣
6. 掘図中の方位は磁北を示している
7. 本書の編集、執筆は木原が行った。

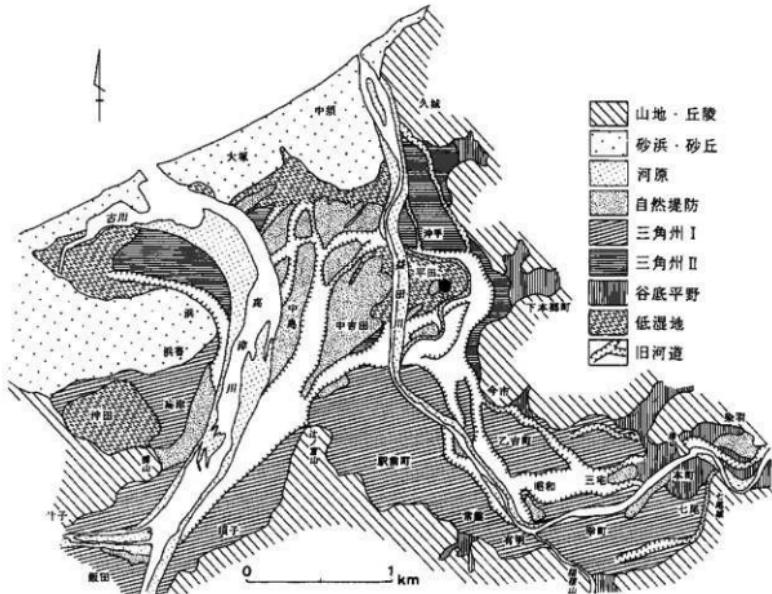
## 1. 調査に至る経過

中吉田平田土地区画整理事業は、平成10年3月に計画決定された都市計画道路中吉田久城線と一緒に区画街路、公園等の公共施設を先行的に整備して良好な市街地の形成を図ることを目的に計画され、平成16年8月に設立された益田市中吉田平田土地区画整理組合を事業主体として平成20年度までの予定で事業が進められることとなった。

これに伴い益田市教育委員会では区画整理組合及び益田市建設部区画整理推進室と調整のうえ、遺跡の有無を確認するための調査を補助事業市内遺跡発掘調査等の一環で行うこととし、平成16年度に事業区域約147,000m<sup>2</sup>の全域を対象として微高地部分を中心に関箇所で試掘調査を実施した。その結果、4区で中世の遺物が多数出土し、付近に中世の遺跡が存在することが判明した。なお、その他の調査区では遺構、遺物は確認されず、4区周辺以外に遺跡は存在しないと判断した。

さらに発掘調査が必要な範囲を確定するため、平成17年度に4区周辺の10箇所で試掘調査を行い、事業区域内に約740m<sup>2</sup>の範囲で遺跡が重なることを確認した。

この結果に基づき、発掘調査の実施について区画整理組合及び市区画整理推進室との協議を進め、道路建設と墓地造成が行われる240m<sup>2</sup>を調査対象地とすることとし、平成18年7月21日付けで区画整理組合から埋蔵文化財発掘届出書が提出され、8月1日付けで益田市教育委員会から島根県教育委員会に対して埋蔵文化財発掘通知を提出した。さらに益田市と区画整理組合との間で7月27日付けで発掘調査業務委託契約を締結し、現地調査を8月初旬から9月初旬にかけて実施し、資料整理、報告書作成を含む全体の委託業務を平成19年3月30日に完了した。



第1図 益田平野の地形分類図と平田遺跡の位置

## 2. 遺跡の位置と歴史的な環境

平田遺跡は益田市中吉田町に位置する。益田川の旧河道と昭和11年に改修された現在の益田川に囲まれた平田地区に所在し、益田川あるいは高津川によって形成された自然堤防の微高地に立地する。遺跡の周辺は畑、宅地、工場用地として利用され、周囲と比較して地形的にわずかに高い平地である。

中世益田氏が本拠とした益田本郷地域には居館三宅御土居跡と七尾城跡を中心に中世の遺跡や寺社、石造物、地割、地名などが色濃く残るが、益田川下流域に関しては中世の交易流通に密接に関わる重要な地域であったことが近年の調査を通じて明らかにされつつある。

益川川の河口部右岸の丘陵上には式内社鷲代賀姫神社が鎮座し、廃寺となった別當寺真如坊（益田市上本郷勝達寺の分坊）には建長七年（1255）在銘の重文阿弥陀如来立像が旧蔵されていた。沖手遺跡は潟湖沿いの大規模な集落で、12～13世紀に繁栄した後、潟湖の干陸化に伴い徐々に衰退し、17世紀初頭に廃絶した。鎌倉時代末期といわれる福王寺石造十三重塔をはじめとする市内の花崗岩製中世石造物の大半は六甲山御影石製であることが判明し、同寺境内からは「元徳二年（1330）」の年号が彫られた地輪も確認されている。今市は益田本郷市に対する新たな市場として戦国時代に成立し、17世紀初頭に終息した。中須地域では東原遺跡、西原遺跡などの中世遺跡が最近新たに発見されている。



1. 平山造跡 2. 治于遷都 3. (市町村合併で廃止) 4. 真如寺 5. 宗教指定古跡「一乘院」  
中東原厚岸 6. 中安國圓滿寺跡 7. 八丈島社代祭延喜式 8. 真如坊跡(猿走丘) 9. 在昭宜阿弥陀寺初來東京  
9. 史跡盐川氏城跡 10. 三室户跡 11. 史跡盐川氏城跡 12. 七重塔 11. 在光寺 12. 式内社染井大石磨神社  
13. 真如寺跡 14. 那珂郡野田町 15. 历史 16. 五重塔 17. 真如寺跡

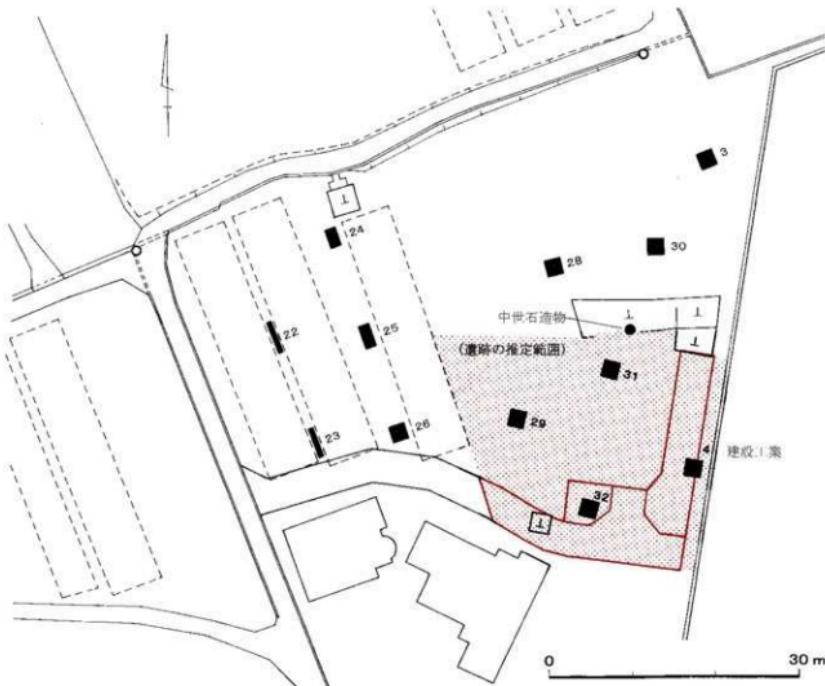
第2図 平田遺跡の位置と周辺の主な遺跡

### 3. 発掘調査の概要

発掘調査を実施した土地の地番は益田市中吉田町679-1、682である。調査の範囲は道路建設及び墓地造成が行われる部分 240 m<sup>2</sup>としたが、その中に既設の墓地も含まれていることから実質的調査面積は 224 m<sup>2</sup>となった。なお周囲の遺跡部分についてはほぼ現況の高さで区画整理が施工され、その後も当面農用地として利用される予定のため調査範囲から除いた。

調査地の現況は畑で、地表は標高2.4m前後である。調査区は工場に面した東寄りを1区、墓地を挟んで西側に離れた部分を2区とし、重機で表上掘削した後、8月2日に発掘作業に着手した。

標高約1.8mから近世の石列が検出され始め、標高1.5m前後で遺構面に達し、近世以降の円形遺構、中世の浅い竪穴状の遺構などを検出した。さらに遺構面より下層の上層堆積状況を把握するための発掘を3箇所で行い、砂礫までの層序を確認した。9月8日をもって現地調査を終了し、9月17日に地元住民と区画整理組合関係者を対象にした現地説明会を開催した。



第3図 試掘調査の位置と発掘調査の範囲

## 試掘確認調査

平成16年度の試掘調査では、4区で白磁、青磁、青花、備前、土器、瓦質土器など中世の遺物9点が出土した（第6図1、8、9）。1は白磁碗の高台、8は瓦質土器のすり鉢、9は突起状の足が付く瓦質土器の鉢である。これらの遺物はすべて標高1.6m～1.9mの間の遺物包含層から出土したもので、第5図の断面図3層にあたる。

遺跡の範囲をさらに絞り込む目的で実施した平成17年度の試掘調査では、29区で標高1.8m前後から瓦質土器や瓷器系陶器など3点（第6図3、4、6）が、31区の標高1.5mの深さから瓦質土器1点、32区では標高1.7m～1.5mの間で上師質土器と瓦質土器3点（第6図5、7）が出土した。3は口径40cmの大型窓の口縁、4は瓦質土器のすり鉢、5は瓦質土器の足鍋の足部分、6・7は瓦質土器のすり鉢である。この他、付近の頃からは青磁殘花皿（第6図2）も表面採取されている。

試掘調査では遺構は確認されなかったが、このような遺物の出土状況から一帯に中世遺跡が存在することが明らかとなり、事業予定地内における遺跡の範囲は第3図のように推定された。

### 1区の調査

1区の南側では、現在の地表から0.6mの深さ、標高約1.8mから石列が検出され始めた。幅は0.5m～1.2mで、20cm以下の多数の川原石が土と一緒にになって列状の集石の状態で確認され、北側がやや内湾した弧状の向きで検出された。石や土の間からは中世から近世にかけての陶磁器が混在して出土した（第7図）。

中世前期の遺物として1の同安窯系の青磁碗、6の祀釉陶器の壺の口縁などが出土し、中世後期では2・3の白磁端反皿の底部、4・5の中中国製焼締陶器の壺の口縁と底部、7～9の瀬戸美濃の灰釉折縁皿、10の瓦質土器のすり鉢、11～13の土器あるいは瓦質土器の壺の口縁などがあった。

近世以降の陶磁器については唐津の一部を示した。14は天目茶碗、15は刷毛目の碗、16は徳利状の壺、17は灰釉折縁皿、18は皿、19は高坂上野系の皿、20は中皿で、いずれも近世初頭の17世紀代のものである。この他にも18世紀以降に下る陶磁器も多数出土している。

このような共伴遺物の年代から石列は近世以降に築かれたものと考えられるが、その性格は不明で



写真1 1区で検出された近世の石列（西から）

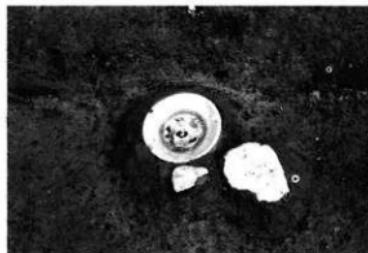


写真2 瀬戸美濃灰釉皿（完形）の出土状況

ある。かつて調査区の南壁に沿う位置から現在の工場用地を東に向けて横断するように里道が通じていたといわれ、この道ないしは道に沿った何らかの区画としての性格も推定されたが、石列の上面で特に硬化した面は観察されず、広島大学附属図書館所蔵の地図「中吉田村（四）」（中国五県土地租税資料文庫）で確認できるこの里道は直線的に表現されている。

この他、内径約0.8mの円形遺構3基が検出された。東側の調査区の境界上で確認された遺構1は内径1.0m、掘り方の径は約1.2mで、内側の下層には粘質土が堆積していた。土層断面で確認できる上端は標高1.8m、深さは約0.7mだが、本来は2層のさらに上位から掘られたものと考えられ、石列を掘り抜いていた。調査区の南西で2基が接する状態で検出された遺構2と3は標高1.7m前後で平面形が確認された。ともに内径は0.7~0.8m、掘り方は1.0~1.2mで、残存する深さは0.2mと浅かった。これらの円形遺構はその規模や形状が似ていることから、ある一定の時期に作られた同じの性格のものと推定されるが、その用途は明らかでない。石列が築かれた時期よりも後に掘られた遺構であり、特に遺構2と3は後に相当削平を受けている。

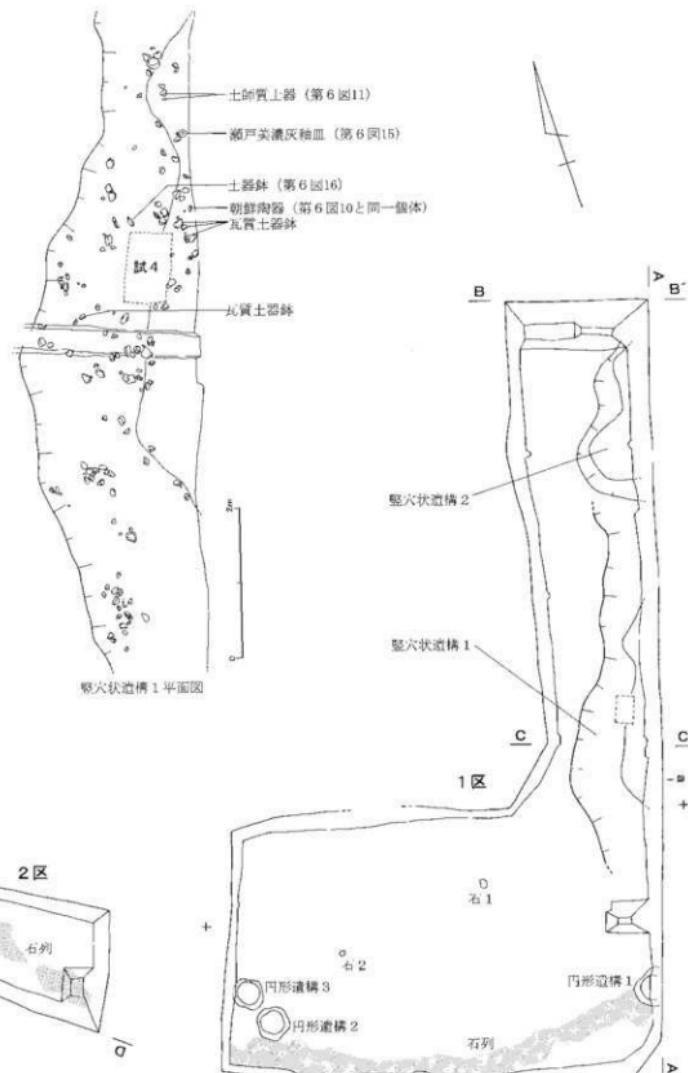
石列の北で扁平な石が2個発見された。石1はやや風化した30~40cmの扁平な河原石である。石2は15cm程度の大きさで、扁平な川原石の周囲を打ち欠いていた。これらについては建物の礎石の可能性も考えられるが、時期は不明である。

調査区の東壁際で深い堅穴状の遺構が2箇所で検出された。堅穴状遺構1は西側の標高1.65mの平坦面から南北約12mにわたって東向きに緩やかな斜面が下がる。壁際の標高は1.4mで、落ち込みの肩部と比較して約25cmの深さがあり、北側は堅穴状遺構2で切られる。全体的な平面形はかなり不明瞭である。斜面及び底面には18cm以下の円礫、細礫が140個程度あり、少量の割石、火を受けた石を含み、中世の遺物が出土した（第6図10~16）。試掘確認調査の4区が重なるが、試掘時の遺物を含め、この遺構から出土する遺物は中世以前に限定され、近世以降は混じらない。遺構はさらに東側へ広がっていると考えられる。

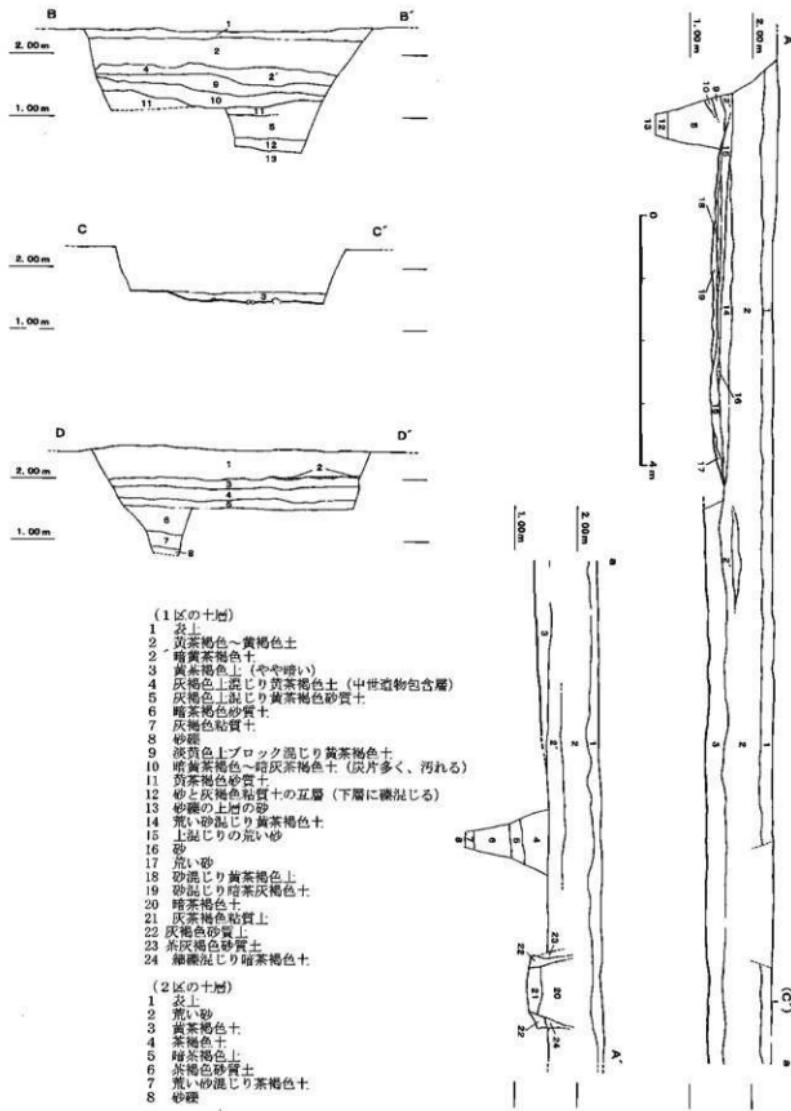
第6図10は朝鮮陶器の壺の底部、11は底部回転糸切りの上師質土器の皿、12は瀬戸美濃の天目茶



写真3 1区で検出された中世の堅穴状遺構全景（南西から）



第 4 図 調査区平面図



第5図 上層断面図

碗、13・15は瀬戸美濃の灰釉皿、14は瀬戸美濃の黒釉皿、16は土器の鉢である。15の灰釉皿は完形で出土した。さらに第8図1の須恵器の杯と22の瀬戸美濃の灰釉皿もこの遺構に伴う遺物である。なお1の占墳時代の須恵器はかなり磨耗しており、上流域からの流れ込みと思われる。中世の遺物は16世紀代のものである。

堅穴状遺構1の北側を切る堅穴状遺構2は、埋土に砂を多く含み、染付など埋土から出土した遺物の年代から近世末以降のものと考えられた。

1区の北端で行った下層確認調査では、堅穴状遺構2の下は厚さ60cmの砂質土、砂と粘質土の互層と続き、標高約0.5mで湧水する砂層に達した。円形遺構1に近い調査区の東壁際で行った下層確認調査では、遺構面の下は厚さ40cmの地山の土、さらに厚さ60cmの砂質土、粘質土と変わり、標高約0.2mで湧水する砂礫層に達した。

1区における遺構に伴わない中世の遺物には次のようなものがあった。第8図4・5は白磁の端反皿の底部、7・8は青磁碗、9は青花の基筒底皿の口縁、10は青花皿の底部、12は底部回転糸切りの土師質土器の皿、15は瓦質土器の鉢、14は土器の鉢、16は土器のすり鉢、17・18は瓦質土器の壺口縁、19は瀬戸美濃の黒釉皿、21は瀬戸美濃の灰釉折縁皿である。

## 2区の調査

地表から深さ約50cm、標高1.9mの高さから石列が検出され始めた。1区で検出された石列と一緒にしたもので、幅は0.6m～1.2mで調査区の中央でいったん途切れる。1区と同様に20cm以下の円礫にごく少量の割石を含む。石列の礫がなくなる標高1.5mまで段階的に精査を行ったが遺構は検出されなかった。

これより下層は厚さ約40cmの砂質土、荒い砂混じりの土へと変わり、標高0.8mで砂礫層に至り、水が湧き始めた。

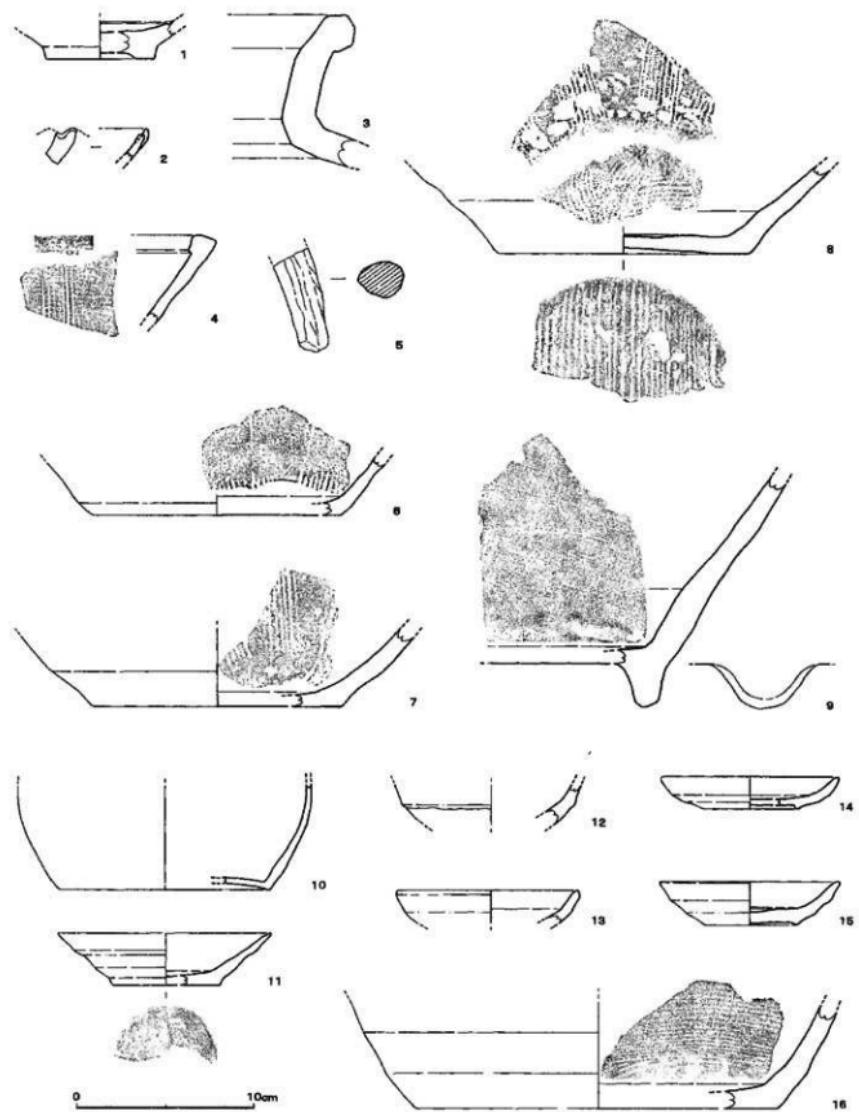
石列の礫や土の間に17世紀代の唐津など近世以降の遺物も含まれていたが、第8図20の瀬戸美濃の灰釉折縁皿なども混在していた。2区全体の中世の遺物として他に第8図2・3の白磁の端反皿の口縁、6の青磁の蓮弁文碗、11の中国製焼締陶器の壺の底部、23の赤間碗、24の備前のすり鉢の口縁などが出土した。



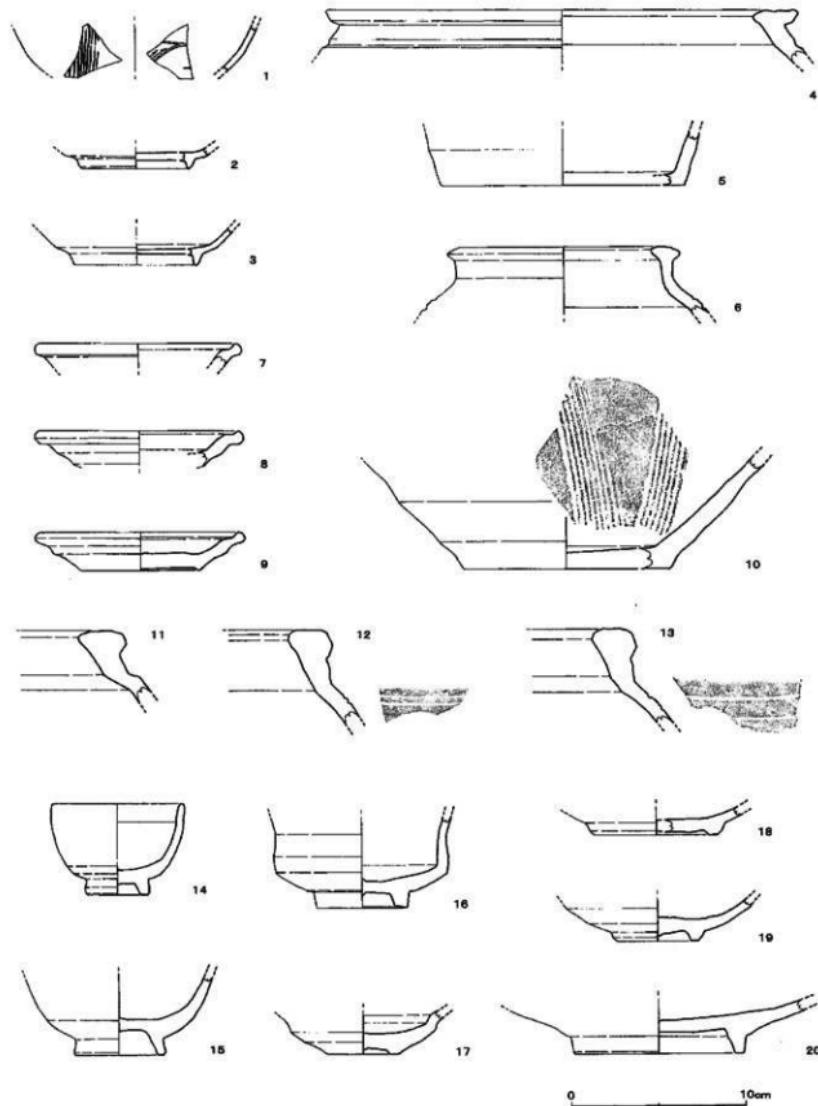
写真4 2区で検出された近世の石列（南東から）



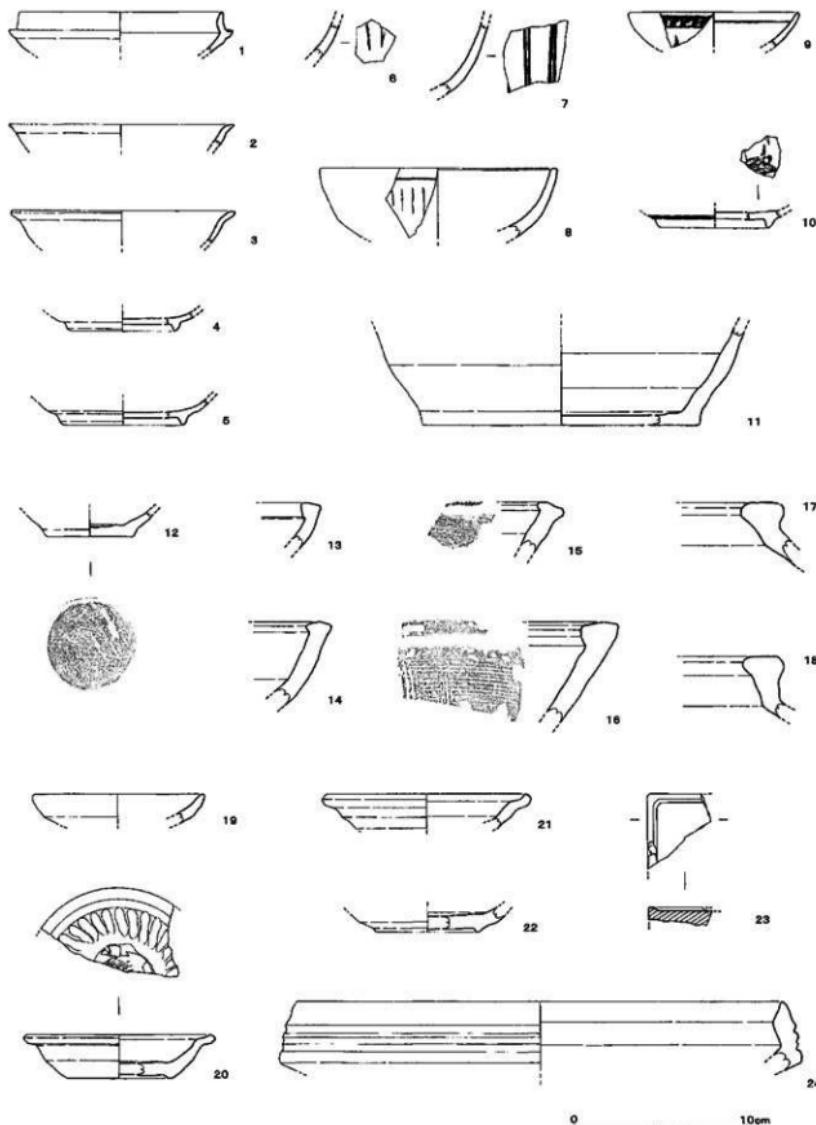
写真5 2区の完掘状況（南東から）



第6図 試掘調査及び1区の堅穴状遺構から出土した中世の遺物



第7図 1区の石列に伴う中世・近世の遺物



第8図 その他の中世の遺物

#### 4. まとめ

発見された中世の堅穴状遺構については、出土した遺物から16世紀後半の遺構と考えられるが、遺構の大部分はさらに東側の調査区の外に広がると推定され、今回の部分的な調査ではその性格について具体的に言及することができない。

遺物には特殊な器種が見受けられず、陶磁器の碗皿以外に瓦質土器のすり鉢、鉢、足錆、壺など調理具、貯蔵具が多数出土することから、平田遺跡は生活の場として継続し、そして一帯での人々の生活は近世以降も続き、現在に至ったと考えられる。

16世紀代の瀬戸美濃の灰釉皿、次いで中国製絹織陶器、白磁の端反皿の出土が目立ったが、中には第6図1の白磁碗、第7図1の同安窯系青磁碗、同図6の褐釉陶器壺、第8図6の龍泉窯系青磁蓮弁文碗、同図7の青磁碗など古くは12世紀に遡るものも含む14世紀以前の陶磁器も出土しており、一帯で中世の全時期を通じて集落が継続した可能性も推定される。

平田遺跡は、高津川と益田川が洪水によって複雑に河道を変遷させた下流域の自然堤防上の安定した地形に営まれていた。下流域に潟湖が大きく広がっていた中世前期の段階で存在したとすれば河川交通の利便を最大限に活用した交易流通のひとつの拠点として機能したことが考えられるが、潟湖の干陥化が進んだ中世後期にあって、16世紀代は下流の沖手遺跡が衰退したものなお存続し、同時に今市が新たに成立し発展した時期にあたる。平田遺跡の性格については、益田川下流域に広域的に点在する今市や沖手遺跡、中須地域所在遺跡との関連の中で解説していく必要がある。

なお、1区の北側に接する墓地の一画には中世石塔の残欠が残されている。その内容は六甲山御影石製と推定される花崗岩製の空風輪1、安山岩質凝灰岩製の火輪2と笠1で、五輪塔3基分と宝篋印塔1基分にあたる。



写真6 1区の穴掘状況（南から）



写真7 墓地の中世石塔

報告書抄録

ふりがな	ひらいたいせき	はくつちょうさほうこくしょ					
著名	平出 達郎	発掘調査報告書					
副書名	益田市中吉田平田地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	木原 光						
編集機関	益田市教育委員会 文化振興課						
所在地	〒698-0033 島根県益田市元町11番15号						
発行年月日	西暦2007年3月30日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
高根川 益田市 中吉田町 平田道路	市町村 32204 種類 679-1、682	34° Q348	131° 41' 20"	150' 135"	2006.8 ~ 2006.9	224	区画整理 (耕作実行)
	上な時代	上な遺構	上な遺物	特記事項			
	中世	整穴状遺構	白磁、青磁、青花、褐釉、陶器、焼結陶器、新鮮陶器、土師質土器、瓦質土器、瀬戸美濃、備前、唐津、赤間窯				
	集落跡						

益田市中吉田平田地区土地区画整理事業に伴う

平田遺跡発掘調査報告書

平成19年3月発行

編集・発行 益田市教育委員会

島根県益田市元町11番15号

印刷 西村印刷所

島根県益田市高津6丁目27番8号